



Title	＜書籍紹介＞山田崇雄 『ポスターの絵本TAKAO YAMADA POSTER DESIGN ARCHIVES』
Author(s)	谷本, 尚子
Citation	デザイン理論. 2023, 82, p. 54-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92373
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【書籍紹介】

山田崇雄

『ポスターの絵本 TAKAO YAMADA POSTER DESIGN ARCHIVES』
一般社団法人山田崇雄デザインインキュベーション 2022 総 304 頁

谷本 尚子 京都精華大学

はじめに

『ポスターの絵本』は、グラフィックデザイナー山田崇雄のポスター集である。山田は早川良雄デザイン事務所のチーフデザイナーとして、独立後はグラフィックデザイナーとして活躍し、関西のデザイン会を牽引してきた。ニューヨーク近代美術館¹、兵庫県立考古博物館などにパーマネント・コレクションがある。

本書に注目したのは、早川の薫陶を受けたデザイナーの中で、現在もデザイン界に発信し続けている山田崇雄という人物に興味を抱いたからである。2022年12月6日、著者に聞き取り調査をするため、兵庫県芦屋市にある株式会社TCD（以下TCD社と省略する）を訪問した。本稿では『ポスターの絵本』を手元に置き、聞き取り調査にて知り得た情報を紹介したい。

山田崇雄について

山田崇雄は1938年大阪市東区で生まれた。父親は商業美術家の山田翠であり、幼少期よりグラフィックデザインの現場を見つめて来た。1957年大阪市立工芸高等学校図案科を卒業、同年阪急百貨店に入社し、宣伝部に配属された。

早川良雄が東京にデザイン事務所を開設した1961年、山田崇雄はそれまで勤めていた阪急百貨店を辞め、23歳で早川デザイン事務所に入所する。ただ山田は早川の東京事務所で勤務したのではなく、大阪の事務所の所員として務めたそうである。5年後の1966年には早川良雄デザイン事務所大阪事務所のチームデザイナーとなった²。なお、東京での仕事が増えたため、大阪事務所は1971年に

閉鎖され、山田は大阪事務所の閉鎖と同時に早川の元を去っている。

1971年、早川事務所を辞めると同時に山田は個人事務所を立ち上げ、1977年には株式会社TCDを設立する。現在TCDは東京都中央区と芦屋市に事務所を置く主にブランディングやグラフィックを手がけるデザイン会社となっている。

2007年、大手前学園創立60周年記念のイヴェントとして山田崇雄50周年記念展が開かれ、図録が出版されている³。ここで取り上げる『ポスターの絵本』の内容の一部はこの時整理されたものも含まれる。

『ポスターの絵本』

本書では、著者が仕事で依頼を受けて制作したポスター58点とロゴマーク12点、社内に掲示するための社員へのポスター98点、そして崇雄の父で商業美術家の山田翠のポスター11点が掲載されている。菊判のハードカバーとなっており、図録集というよりは読み物の判型をとっている。基本的なページ構成はポスター作品を右頁に配し、左頁にキャプションと共に作者自身の短いコメントが書かれている。

前半のポスター作品は、1958年の日宣美展に初出品、準入選となった阪急百貨店のクリスマスセールポスターから始まり、2022年、一般社団法人総合デザイナー協会（DAS）のメンバーが参加する「0」をテーマにしたポスターデザイン展への出品作品まで、クライアントがある個性豊かな作品が掲載されている。

1960年代のポスターでは、音楽会のポスターが

多い。日宣美展に出品した作品「マーチ・ファンタジー（図1）」のキャプションには当時影響を受けた作家として版画家の泉茂の名前が挙げられた。

泉茂さん（1922-1995）のリトグラフ「Musician」シリーズに心酔していたころの作品。

吸い取り紙の様な自分がいた。その素直さが懐かしい。⁴

泉茂は早川良雄の親友であり、山田孝雄の大阪工芸学校の先輩に当たる。泉は大丸宣伝部で活躍した後、国際版画ビエンナーレで受賞し、山田が早川の事務所所属していた頃は、ヨーロッパで活躍していた。

そのほか、「ソール・スタインパークに傾倒していた（p.20）」、「ダダイズムもシュルレアリスムも意味も解らず格好良かった（p.26）」などのコメントが見られる。1960年代のポスターからは、イラストの表現力に着目していたことが分かる。時代性と早川事務所での経験が影響しているのだろうか。

1970年代独立した山田のポスターには、竹中工務店や大阪青年会議所、日本パッケージデザイン協会、国際青年会議所マニラ会議など、幾つか大きなクライアントのある仕事が増え、また、写真を用いたポスターの制作が多く見られる。

その作風の変化について山田は「早川先生への反動も半分あるよね。…その世界に見るべきものがあると思うんですよ。ところが飯食わなあかんと、…そこからね、早川先生の、そのルートが変わりました。…⁵」と語る。

インタビューの中で、早川良雄や田中一光、金野弘等、山田崇雄の一世代上の関西のデザイナーは、情緒的な具象性を保っていたと山田は語った。「そうゆう風ふんわりね、ほんわかしたコミュニケーションの中でね、成立するんですね。…だけでもこれは方言なんです。…デザインっていうのはね、方言だけではだめで、標準語が必要なんです。⁶」

ここでいう方言と標準語は、関西的な情緒性と関東を中心にモダンデザインの構成的感覚を指している様に思われる。山田は「デザインがいろいろな社会的な影響力を持てば持つほど標準語が必要です。そのことに気づけばこれは、大きなターニングポイントですよ。⁷」と語る。1970年代は写真を用いたポスターが多数制作された時代で、それもデザインのための写真家が大勢現れた時期である。この中に山田の代表作がある。

竹中工務店の仕事は、独立した際に田中一光から回ってきたという。先述した MoMA にコレクションされた作品（図2）のキャプションには、ポスター制作に惜しみなく労力を注ぐことができた時代のエピソードが含まれる。

大阪・中之島に建設中のロイヤルホテル新館をモチーフにデザインしたポスター。建物の窓が三方に無限に連なりを感じさせるトリミングと、飛来するヘリコプターの対比によって、ホテルのスケール感と都市感を表現した。現在ではコンピュータ処理によって難くできる画像も当時では実写が余儀無くされ、航空管制局の許可、パイロットとの交信による地上30mでのホバーリング等と、映画の撮影さながらの大仕事であった。経済原則を無視した仕事が許された懐かしい時代の作品である。…⁸

このポスターは、ニューヨークのアートディレクターズ賞で銀賞を受賞し、MoMAに収蔵された。

発想の連鎖がクリエイティブ（発見）を助ける。

『ポスターの絵本』の中でかなり大きなヴォリュームを占めるのが、自社の社員たちとのコミュニケーションのためのポスターである。「常に押し付けがましく無く自身の胸中を伝えたい」、「何に重きを置いて社業に取り組んできたか」⁹、長年グラフィックデザイナーであると同時に経営者としてクライアントと向き合ってきた山田が、社員、お

そらくは若手デザイナーたちに伝えたい思いをポスターにして制作したものと言える。2002年、TCD25周年が一連の作品の始まりだ。なお、本書の本扉をめくるとスタッフが作成したTCDのポスター（2005年制作）が口絵となって本書を寿いでいるのも好ましい¹⁰。

2012年から4年間作成されたLogic of Alphabetシリーズは、所員への26のメッセージである。AはAttack, BはBegin等々。初めの2年間AからNの14文字には、Dynamic & Delicateと書き添えられており、2014年からの2年間OからZまでのポスターには、Thoughtful Creative & Designとの言葉が添えられた。

山田崇雄はポスターを大道芸と似ていると、次のように語る。

私はポスターを大道芸に例えることがよくあります。それは一芸の下で通りかかった人の目を射り心を奪ってしまうところです。…芸人は自らの芸を楽しみ、その序でに客を楽しませています。そして観客も芸人の演じるうつつを楽しんでいるように思えて仕方がありません。…その点ポスターも同じ立場にあると思います。ポスターの持つコミュニケーション機能も大道芸人の演じる所作も同様のことが言えるのではないかとと思っています。¹¹

年に数回作成される所員の為のポスターは、山田が得意とする考えさせるポスターたちだ。（図3参照）

父山田翠（1903-1948）のこと

山田崇雄は50周年記念展の際も父翠の功績を記録している。正確には補修・再構成を含む作品紹介という形だ。

山田翠は日本画を東京の川端が学校で学んだ後商業美術家となり、昭和になってから大阪にてアトリエを主催し、グリコ、ハウスカレー、ゲンブ石鹸、朝日新聞社などの依頼を受けていた。今竹

七郎、霜鳥之彦、杉浦非水、多田北鳥、山名文夫と同じ時代に活動し、大阪で発足した商業美術連盟の活動に参加した¹²。

山田崇雄は自身をグラフィック・デザインの世界に駆り立てた人々の中に、父親山田翠を挙げている¹³。日本画を学びながらも商業美術家としてモダンデザインを素直に吸収し、時代が求めるグラフィックを作成する姿勢は、崇雄に受け継がれていると言えるだろう。1930年代の山田翠のポスターについて、山田は下記のように書く。

以下のポスターは、自ら参加していた商業美術連盟展への出品作品と思われる。何も単純化されたモチーフとその表現は美しく、力強い洗練されたフォルムに終始している。我が師早川良雄氏の言を借りれば“翠さんは単化の名手”ということだ。カッサンドルをはじめ欧州グラフィックデザイナーの傾向を強く受けていた時代、父もその一人であったことが窺え、嬉しい。¹⁴（図4参照）

本書に翠のページが加わることで、1930年代から現在に至るまでの、日本のポスターデザインの変遷を通覧できると言えるのではないだろうか。

終わりに

今日コミュニケーションの手段がデジタル化され、特に小さな画面で見る動画が主流となりつつある。そうした環境の中で、山田は「人々に考える間を与え穏やかに理解を促す」ポスターの存在が愛おしいと語る¹⁵。

本書は書店で販売されないいわゆる私家本であり、山田崇雄という人物の個人史を通覧しただけのものだともいえるが、ここには約90年の、関西のグラフィックデザインを巡る物語があり、本書は関西デザイン史の資料となるべき書籍だと考える。

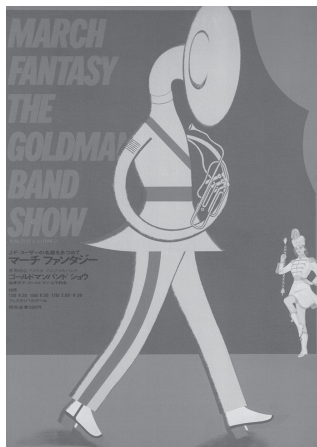


図1 マーチ・ファンタジー ザ ゴールドマン バンド ショウ ポスター
1962年(1030×728mm)



図4 「北陸東尋坊へ観光地ポスター」
1930年頃(1030×728mm)

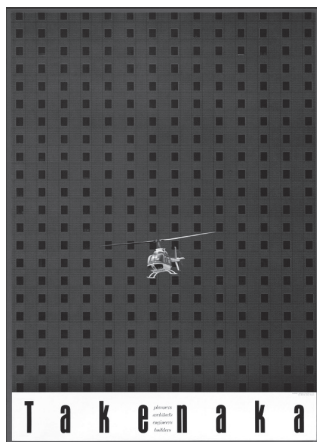


図2 竹中工務店ブランド訴求ポスター
(2) 1977年(1030×728mm)



図3 “TCD” Thinking Circuit
2007年(1189×841mm)

註

- 1 MoMA collection: <https://www.moma.org/collection/works/5761>
- 2 麴谷宏「早川良雄・小史 48人の証言から」, 編集・構成 田中一光, 『早川良雄の世界 — その情感と形状』, 講談社, 昭和60(1985)年6月5日 第1刷発行。(ページ数記載無し)
「早川は病気ひとつせず, 毎週律儀に東京大阪館を往復していた。(中略) 一方, 大阪事務所はその後また北の堂島セントラルビルに移っている。こちらは山田崇雄がチーフとして切り回し, 大柱公人がサポートしていた。山田はそれまで阪急にいたが, 瀧本が東京に出るときによばれて留守を託されていた。…」
なお『早川良雄の世界』では, 麴谷宏, 田中一光, 長友啓典, 瀧本唯人と並んで編集委員として参加している。
- 3 編集・出版, 株式会社 TCD『Expression: Impression Takao Yamada Exhibition 50』, 2007年。
- 4 『ポスターの絵本』, p.14
- 5 2022年12月6日のインタビューから
- 6 同上
- 7 同上
- 8 『ポスターの絵本』, p.46
- 9 『ポスターの絵本』, p.131
- 10 『ポスターの絵本』, p.2。ポスターのタイトルは「Fling TCD」キャプションには「DESIGN と VISION は相思相愛…」とある。
- 11 『ポスターの絵本』, pp.293-294
- 12 『ポスターの絵本』, p.289
- 13 『ポスターの絵本』, p.291
- 14 『ポスターの絵本』, pp.282-283
- 15 『ポスターの絵本』, p.295